

てんじんの 大山山麓の開墾地 に用水を供給する 天神野円筒分水工



鳥取の秀峰大山の裾野に広がる台地の東、関金町と倉吉市にまたがって天神野台地があります。この広大な大地は明治末期まで、草木の生い茂る雑木林でしたが、山根愛吉によって3000haの水田に生まれ変わりました。それまでの天神野は日当たりの良い場所に桑畑や柿畑があるくらいで、ほとんどが荒地でした。そこで、愛吉は七平ヶ平の谷間をせき止めてため池を作ることの思い立ち、鳥取県庁へ相談したところ、大正2年(1913)松崎技師がため池を作って、天神野全体を開墾して水田にする提案をしました。

こうして、小鴨川の水をせき止めて明高付近から引き入れ、途中にいくつかのため池を造り水田とする天神野耕地整理組合が作られました。しかし、開墾作業は難工事で、計画よりも多くの水を必要としました。

大正10年、益田伝吉の組合長の下で開墾計画は立て直され、翌年から狼谷ため池の工事が始まり、13年に完成しました。天神野への入植は大正10年から地元の人以外に西伯郡や気高郡、八頭郡など、県内各地から集まってきた始まりでした。

天神野一帯をまかなう灌漑用ため池「狼谷ため池」は、昭和18年(1943)から3年の歳月をかけて、現在のような規模にまで拡張されました。最大貯水量132万トンは天神野区域にある8つのため池の中で最も大きく、農業用ため池としては県内一の規模です。この堤防から眺めると水面に大山が逆さに映るため、誰ともなく「大山池」と呼ぶようになったということです。

この狼谷ため池からの用水を5つの水路に分けるために、昭和43年(1968)に建設されたのが円筒分水工です。この分水工は2つの円形の壁によって区切られており、直径が内側5.0m、外側11.5m、そして最外壁が14.4mです。用水は分水工手前で地下4.2mのところを管によって横断し、分水工内壁の中心に吹き上げます。内側の壁からあふれ出た水は、外側の壁と最外周の壁との間を区切る分水隔壁によって5水路にわかれます。それぞれが決められた配分比率で用水が分かれるように配置されており、これによって地域の水をめぐる争いは解消されました。



天神野円筒分水工
県内唯一の農業用分水施設で、狼谷ため池からの用水を5つの水路に分水するモノで、昭和43年(1968)に作られた。地下から吹き上げる用水を一気に5つの水路に分ける仕組みとなっている。

■位置図



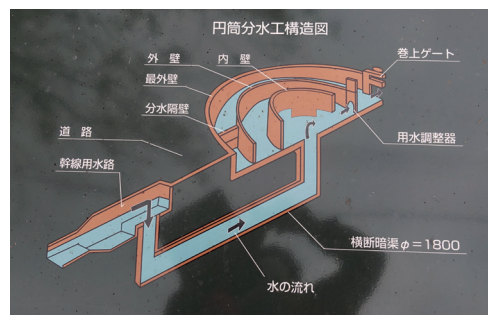
小鴨川の取水口



狼谷ため池 (大山池)



大山池から円筒分水工への水路。ソーラーパネルを設置。



円筒分水工構造図